

大使コラム（2012年8月）

8月、夏まっ盛りのリスボンでは、交通量が減少したのと対照的に、観光客の姿が目立っています。温度が30度台後半になる日もありましたが、普段は強い日差しでも日陰に入れば爽やかな南欧の夏が続いています。

厳しい経済状況でも、ポルトガルの人々は夏期休暇を忘れません。去年は国会も緊縮策の審議のため夏期の閉会を2週間で切り上げましたが、今年は本日から休会に入りました。とはいえ、一般の人々は所得の低下で休暇の出費も抑えようとする傾向が顕著なようです。今年の休暇は近場で過ごす、という声をよく聞きます。

そんな中、ポルトガルの経済状況は、5月末のトロイカの定期審査で、財政再建についてやや楽観的な見通しが示されていました。しかし、ここに来て内需の冷え込みや欧州経済の悪化の影響で、雇用状況、GDPの回復、さらに税収などマクロ経済の指標が厳しさを増しているようです。このため、本年末の財政赤字の目標数値4.5%など、重要な数値目標がこのままでは達成できないのではとの懸念が広がってきました。

先月初め、「公務員、年金受給者へのボーナス支払い停止措置」について、憲法裁判所が違憲判決を出しました。各方面から驚きの声を持って迎えられた判決ですが、制度上この判決は、政府や国会を拘束することになります。政府支出を削減する措置が違憲となると、財政再建の道のはさらに厳しいものとなるでしょう。

なお、この判決は、右「ボーナスの停止措置」が公務員等を差別し、憲法の「国民の権利の平等」に反するとの論旨です。しかし、本年の予算措置、つまり「本年の支払い停止」は合憲としながら、「明年以降の支払い停止」だけを違憲としていること、さらに、公務員の「月給」も削減されている中で、「ボーナス」の削減だけを違憲としている点などに疑問の声も出ています。また、高度な政治判断に係わる政策を裁判所が法的観点だけから判断し、国会や政府を拘束することが、民主主義や三権分立の理念にかなうのかなど、司法権や統治機構のあり方という面からも批判が出ているようです。

右に加えて、現内閣の有力閣僚が、学位を不正に取得していたとのスキャンダルが大きな話題となっています。法的な問題はないとしても、国民が緊縮政策で苦労している最中にこのようなスキャンダルが出るのは、国民の忍耐力を損なう結果となりかねません。

このような状況で、コエーリョ政権は否定していますが、近く、財政支援に係わる履行義務について、条件の緩和を求めるのではないかとの見方が強くなってきました。例えば、財政赤字の削減目標の期限の先延ばしや財政支援への支払い金利の軽減などが考えられます。

また内政面でも、国民の不満や野党の批判に応え、いずれ内閣改造もあり得るとの見方が出ています。

同政権は過去1年あまり、国会での安定多数と国民の支持を背景に、現実的で自己抑制的な緊縮策と経済競争力の強化策を進めてきました。輸出の促進などにも、官民挙げて取り組んでいます。先般、ポルトス外相とガスパール財務相が60社もの経済人と共に中国を訪問したのも、この努力の一環です。外相は経済外交の先兵の役割を果たすかのように、就任以来すでに20カ国以上を訪問しました。地道な努力を進める当国の基本路線は変わらないでしょう。しかし、状況が厳しくなる中で、この試練をどう乗り越えていくのか、今後も注視していきたいと思います。

先月も、当国北部にあるガイヤ市を訪問する機会がありました。ドーロ川を挟んでポルト市の対岸に広がる都市です。与党の有力者である市長によれば、人口は30万人を超え、リスボン、シントラに次ぐポルトガル第3の都市となっているそうです。歴史的にはポルト市と一体で発達してきた地域で、将来合併の可能性もあるとの説明でした。産業は、当国を代表する酒精強化ワイン、ポルト酒の醸造所が集中しているほか、繊維など伝統的な産業と共に、近年は医療関係や情報通信産業などの先端産業も発達しています。

同市長からは、この経済危機の中で地元の産業発展のため、日本との経済関係を深めたいとの希望が表明されました。地元マスコミとのインタビューでも、この問題に高い関心があるのを感じました。

当日は、ポルト酒などの製造会社と医療関係のソフト開発会社も訪問したほか、地元企業の方々と懇談の機会を持ちました。ここでも日本との経済関係の強化に強い期待が示めされました。

ポルト市も含めたこの地域と首都リスボン圏では、企業の特徴に対照的な相違があるそうです。リスボン圏の企業は伝統的に政府依存が強く、規模は大きいけれど国内市場への志向が強いそうです。他方、ポルト圏の企業は政府への依存が小さく、その分、規模は小さいが海外との取引に力を入れてきて、進取の精神に富むとのことでした。

最近、官民挙げての海外市場への売り込みに、温厚なポルトガル人のイメージを超えた、ある種の鬼気迫るものさえ感じることがあります。日本がここでポルトガルの努力に協力できれば、将来の両国関係の発展に大きな効果があると思われます。危機の局面は飛躍の可能性を秘めていることも、忘れてはならないでしょう。

夏の盛りは、まだまだ続きます。
皆様にはご自愛のほどをお祈り申し上げます。